

恒例の「元旦の日刊紙」 新年の幕開けを飾った「CES 2022」

神谷 直亮

今年も分厚い「日本経済新聞」「朝日新聞」「読売新聞」の元旦号に目を通すことで令和4年が始まった。

何と言っても読み応えがあったのは、「日本経済新聞」の「NTT、光技術で6G実証」と「上司・部下もアバター出社」であった。「光技術で6G実証」では、NTTが、2025年の国際博覧会（大阪・関西万博）の会場に次世代通信規格「6G」をにらんだ独自の通信網を築くという。具体的には、会場となる人工島・夢洲の通信を担うインフラとして、光技術を使った通信基盤「IOWN (Innovative Optical and Wireless Network)」を導入する。最大のメリットは、大容量のデータを低消費電力でやり取りできることだ。主催者の日本国際博覧会協会は、「次世代移動通信サービスの他、アバターを使って会場外からメタバース（仮想空間）上の万博に参加できるサービスの展開を模索する」と胸を張っている。「上司・部下もアバター出社」では、在宅でも一体感を生む新職場が紹介された。その一例として挙げられたのは、サーチテクノロジーを基盤にしたウェブサービスを国内外の企業・官公庁に提供しているマーズフラッグ(MARSFLAG)社(東京・中央区)だ。同社は、2021年7月にインターネット上の仮想オフィスに変わったという。つまり自宅からパソコンで出勤して、上司のアバターと相談することができるようになった。

まさに今年のバズワード「メタバース」の波に乗りまくっている。

朝日新聞は、元旦号から「未来のデザイン」というタイトルの連載を始めた。プロローグでは、「ドリカムのコロナに突き付けられたライブの変化」「岡山県西栗倉村の樹齢100年の森」「未来予測本、未来探索本の売れ行き」などを具体的に取り上げていた。未来予測ということに興味があったので、その後もフォローしたら、3日号は「野生動物がいる日常に潜む陰」、4日号は「仕事感染暮らし支える現場が」、6日号は「いのちワクチン進歩常識破り」、5回目の8日号は「つながりネット越しの誰か頼りに」であった。「動物がいる日常に潜む陰」では、感染症のリスクに触れていた。

読売新聞の元旦号は、第1部が本紙、第2部がテレビ・ラジオ、第3部がエンタメ、第4部がスポーツという構成で、本紙36ページに対し別刷りが50ページであった。完全に巣ごもり中の読者を楽しませる効果を狙ったように思われた。本紙での注目は「災厄越え 次の一步を踏み出そう」というタイトルの社説で、この中に「町工場の優れた技術が、小惑星探査機『はやぶさ2』を支えたこと、宇宙に散乱するゴミを回収して、宇宙の安全を守り、ビジネスを成功させようという試みが進められていること」など、宇宙業界の実績と課題に触れていた。昨年の元旦号では、「みちびき衛星3号機」

の写真を挿入し、「国土交通省が、みちびき衛星による日本版全地球測位システムを航空機の着陸支援に活用する方針を固めた」という記事を載せ、「高精度の測位を誇るみちびき衛星の位置情報誤差は、数センチ程度」と詳しく解説していたが、今年は既述の2件にごく簡単に触れたのみであった。ちなみに宇宙のゴミ(Space Debris)の除去にチャレンジしているのは、アストロスケールホールディングス社(東京・墨田区)である。

テクノロジー見本市「CES 2022」開催

新年の幕開けを告げる恒例のテクノロジー見本市「CES 2022」は、1月5日から7日まで米ネバダ州ラスベガスのコンベンションセンター(LVCC)で開催された。

主催者のCTA(Consumer Technology Association)は、1月8日までの開催を予定していたが、新型コロナウイルス「オミクロン株」感染対策のために自発的に1日短縮してしまった。また、会場でのリアルのみとはいかず、オンラインも合わせた開催となった。

1月7日のCTAの発表によれば、「2,300社・団体(スタートアップ800社を含む)がLVCCに集結し45,000人が来場した」という。2020年の出展者数は、約4500社・団体と言われており残念ながら半減した。一方、参加者の情報によれば、会場での感染防止対策は徹底しており、コロナワクチンの接種証明書提出を条件付け、さらにマスクの着用を義務付けられたという。さらに、入場証に緑、赤、黄色のシールが張られ、緑は握手がOK、赤はダメ、黄色はグータッチならOKとの意思表示に徹したようだ。



写真1 「CES 2022」は、CTAのGary Shapiro CEOの基調講演で1月5日に開幕した。(出典:ces.tech)



写真2 中国のHisenseは、ATSC3.0対応のテレビを公開した。(出典:ces.tech)

今年もコロナ禍でのラスベガス出張がかわず、アメリカ国内やカナダから出張した友人、現地の報道関係者からの情報、ces.techのウェブページをもとにレポートをまとめる羽目に追い込まれた。

まず、今年の特色として挙げられるのは、米国における次世代テレビ「ATSC3.0」の強気な普及見通しである。昨年末の普及率は35%位と言われていたが、今年の会場では「70%位を達成」と予想する関係者が多かった。視聴可能なTV市場も昨年末の40%から大幅に増える見込みである。このようなATSC3.0による放送を牽引しているのは、Cox Media Group、Graham Media Group、Hearst Television、Sinclair Broadcast Groupなど750テレビ局で構成される「Pearl TV コンソーシアム」である。

ATSC3.0に対応するテレビの出荷については、CTAが2021年の300万台から2022年は450万台と予想している。弾みをつけそうなのが中国のHisense社で、今回の「CES 2022」において同国メーカー初となる「ATSC3.0」対応のスマートテレビを公開した。LG、サムスン、ソニーに次ぐ4社目で、「U9H、U8H、U7H」の3種のULED4Kテレビを今夏より発売するという。少々オーバーな言い方になるが、雰囲気としてかつての家電見本市の再来を感じた。

次いで、「CES2022」から「スペーステック」と「フードテック」が加わった。新設のスペーステックの展示では、シエラ・ネヴァダ社の子会社のシエラ・スペース社（米コロラド州ブルームフィールド）が開発した「Dream Chaser DC100」スペースプレーンが注目を集めた。同社の宇宙輸送における最新のイノベーションと言える製品である。当初は、有人宇宙船の計画であったが、現在はNASAによる無人補給船としての運用を想定している。大型ロケットに搭載して垂直状態で打ち上げられ、帰還は通常の滑走路を使う。

さらに、展示スペースの拡張が続いてきたモビリティの分野に、次世代の移動スタ



写真3 シエラ・スペース社は、「Dream Chaser」スペースプレーンのフルサイズモックアップを展示して関心と呼んだ。(出典:spaceexplored.com)

イルを追求するソニーグループとゼネラル・モーターがEV（電気自動車）の試作車を出版して人気を呼んだ。

ソニーグループの「Vision-s 02」と呼ぶこの新型SUVタイプのEVは、オーストリアのマグナ・シュタイアとソニーが共同開発したもので、多様な車室空間イメージング、高度なアクティブセーフティセンシング、確実を目指すパッシブセーフティセンシング、5Gネットワーク・コネクティビティによる常時モニタリングなどの技術を実装している。ソニーもEVでモビリティ分野への進出を真剣に検討しているようで頼もしい。

ゼネラルモーターズは、「シボレーシルバード」のEVモデルを初公開した。同社は、2025年までに30車種以上を電動化する計画のようだ。

予想外だったのは、最終日となった1月7日にラスベガス・モーター・スピードウェイにおいて、ドライバー無しの「Indy Autonomous Challenge」レースが開催されたという。「CES2022」の最終イベントを飾ったのは、モビリティの最高峰を行く「Formula One Car」による160mph自動運転走行であった。

今年の注目点になったもう一つは、最近のバズワードとも言えるメタバース関連の展覧だ。この潮流に乗ったのは、パナソニックグループのシフ



写真4 シフトール社は、VRを体験できるメガネ型ヘッドセット「MeganeX」を初公開しメタバースの潮流に乗った。(出典:ja.shiftall.net)

トールとソニーである。

シフトール（Shiftall）は、VRを体験できるメガネ型ヘッドセットを初公開し、メタバースの普及を見据えた戦略を明確にした。「MeganeX」と名付けた端末は、高画質で他社のヘッドセットより数段軽い250グラムに仕上がっている。付属品として、VR空間で熱を感じたり、冷たさを体感できる着脱可能な冷温機器「ペブルフィール」や口に装着して音漏れを少なくするマイク「ミュートーク」も投入するという。発売については、米国と日本で今春が見込まれている。

ソニーは、待望のブレーステーション「PS5」向け次世代ヘッドセット「PSVR2」のベーシックな情報を公開した。4K HDR解像度のディスプレイ、110度位までの視野角の拡張、サイクル集中型のFoveatedレンダリング、アイトラッキング機能などを搭載するようだ。

ソニーは、待望のブレーステーション「PS5」向け次世代ヘッドセット「PSVR2」のベーシックな情報を公開した。4K HDR解像度のディスプレイ、110度位までの視野角の拡張、サイクル集中型のFoveatedレンダリング、アイトラッキング機能などを搭載するようだ。

Naoakira Kamiya
衛星システム総研 代表
メディア・ジャーナリスト

SWE DISH

ニッサン新エルグランド4WD
5名定員
1.2m径・自動捕捉アンテナ搭載
車高2.2m 以下（地下駐車場可）
3.6 KVA NMG アイドリング運用
水圧エコ・ボール4m 搭載
強化サスペンション
国内（100V）海外（240V）対応
IPコントロール
ハイビジョン映像伝送
運転席からワンマンオペレーション

SMART SNG
HD TV, 3D TV and IP OVER SATELLITE EGO OPERATION
スマート・サテライト・ニュース・ギャザリング

<http://www.bizsat.jp>



設計・製造・衛星通信のことなら
エーティコミュニケーションズ株式会社
TEL: 03-5772-9125

A Communications k.k.